

エデュコ
Educo

学びのチカラで 人と社会を 未来へつなぐ

No.55
2021年

俳優
サヘル・ローズさん
巻頭インタビュー p.2

知っておきたい教育 NOW p.4

- ① 学びのデジタルトランスフォーメーションに向けて
- ② 「つながる」がキーワード 未来社会の創り手を育むかわさきGIGAスクール構想

きょういく見聞録 p.8

だれにでもできる「富岡システム」の提案
～「YouTube」と「Zoom」,「開発用PT」を用いた
研究発表の在り方～

地球となかよしトピックス p.10

世界は変えられる カラフルに
～「つながる」から「つなげる」へ～

Information 北から南から p.12

地球となかよしゼミナール p.14

親と子どもが楽しむ美術館 ②
子どもたちが1日楽しむことができる美術館

Front Runner p.15

広がる「小さな道德授業」

ほっとな出会い p.16

株式会社シリウス 代表取締役社長
国士舘大学経営学部客員教授

亀井 隆平さん

次世代につなぐ支援のバトン

イランに生まれた薔薇の種は日本で花ひらく

俳優 | サヘル・ローズさん

砂漠に咲く薔薇

4歳で孤児院に入ったのですが、あまりに幼かったため、自分の本当の名前や正確な年齢も、生みの親の顔も思い出せません。「サヘル・ローズ」は今の母に引き取られてから与えられた名前です。まだ学生だった母は一族の猛反対を押し切って私を養子にしたため、家族から絶縁されてしまい、私が8歳のとき、当時日本で空手の先生をしていた母の旦那さんを頼って二人で来日したのです。しかし、旦那さんとはうまく行かず、程なくして離婚。母娘二人の生活が始まりました。母はまだ20代で、二人とも日本語は一切話せませんでした。

困難は続きました。一番つらかったのは中学生の頃。当時は日々の食べものにも困るくらい生活が苦しく、学校でのいじめもエスカレートして、精神的に追いつめられていました。成績も学年の最下位まで下がって、落ちこぼれの状態。でも毎日必死で働いてくれている母にはいじめのことは言えず、母は私が学校では人気者で優等生だと信じ込んでいたんです。

死に片足を踏み入れたとき、私を変えた母の言葉

いじめに耐えかねて感情が爆発したある日、初めて母に「死にたい」と訴えました。そのとき母が言ったのが、「サヘルが死にたいならいいよ。でもお母さんも一緒に連れて行って」。普通は「死んじやだめ」って止めるじゃないですか。あつ、私についてくるんだって、とても救われました。ここまですべてを捧げてくれている彼女の行動って、簡単にはできないと思うんですよ。

母はいまだにそうですけど、決して私を変えようとは思いません。いま、自分の脆さも好きになれて、弱さを強さに、長所に

変えられたのも、

母の影響かもしれません。母は無理矢理私を強くしようとはしなかった。「サヘルは弱いね」って。「でも弱いからこそ、いろんなことに気づけるんだよ」って、私の良さを伝え続けてくれるのです。

いじめの経験を本に書いたことで、

「日本人として恥ずかしい、申し訳ない」とのお声をたくさんいただきますが、決して日本を責めているつもりはなくて。誰かが誰かを攻撃することはどの国でも起きています。いじめられている側の心のケアとともに、いじめている子たちに何が起きているのかを一緒に考えていきたい。その子が背景に抱える闇や孤独に向き合ってあげないと、いじめをする子も救われないので。同時に、いじめという言葉があまりに軽く扱われてきたので、これは「犯罪」であり、「殺人」行為なんだと伝えていくことが必要ではないかと思っています。

「支援」が「支配」にならないように

いまは国内の児童養護施設にお菓子や洋服や筆記用具などをお送りさせていただいており、施設を退所した子どもたちが生きていく土台をつくるお手伝いも行っていきます。彼らは18歳で施設を出たあと、大学に行きたい、免許を取りたいなどの夢があっても、支えてくれる大人が誰もいません。そういう子たちのスポンサーとなってくれるところを探したり、知り合いに橋渡ししたりしています。



PROFILE

1985年イラン生まれ。4歳で孤児院に入り、8歳のとき養母のフローラさんとともに来日。ホームレス生活や壮絶ないじめなどを乗り越え、高校生のときから芸能活動を始める。主演映画『冷たい床』はさまざまな国際映画祭で正式出品され、第6回イタリア・ミラノ国際映画祭にて最優秀主演女優賞を受賞。2018年、第9回若者力大賞受賞。芸能活動以外にも、世界中を旅しながら難民キャンプや孤児・ストリートチルドレンの支援など、弱者に寄り添う活動を続ける。アメリカで人権活動家賞受賞、国際人権NGOの「すべての子どもに家庭を」の活動では親善大使を務める。著書に『戦場から女優へ』（文藝春秋）、写真詩集『あなたと、わたし』（ジャーナリストの安田菜津紀氏との共著/日本写真企画）がある。

思い通りにいかないことも多いです。習い事やお教室に通わせてあげても、突然やめられてしまい、「結構お金かかってたんだけどな」と残念に思うことも。でも彼らからしたら、別にすがつているわけじゃない。こちらがそうしただけ。それを一歩間違えて、「ここまでやってあげたのに、何で！」と高圧的になると、もう支配なんです。自分が思うような行動をとらなかつたことで苛立ってしまったらアウトなんです。支配や押しつけにならないよう、彼らを支えるなかで日々気づかされ、成長させてもらってます。

教育支援には一番力を入れたいですね。世界を変えていくのは教育です。紛争地域で生まれ育つ子どもたちは、一歩間違えると大人になるにつれて敵国への憎しみの心を抱いてしまいます。彼らの美しい手には武器ではなくてペンを握らせたい。そんな思いもあって、難民キャンプで学校を支える活動をずっと続けています。教育は絶対に裏切りません。インドネシアにアナちゃんという妹のような存在の子がいるのですが、いま中学生の彼女が大学を卒業するまで支

援し続けるつもりです。

支配はしない、依存もさせない。物乞いをする子がいたとして、ただお金だけを渡していたのでは、万が一こちらが支援できなくなったときに共倒れになってしまします。その子を川に連れて行って魚の釣り方を教える、一人で自活していくすべを身につけさせる、それが本当の支援だと思いません。

次世代につなぐ支援のバトン

学校で自分の経験をお話する機会をよくだくのですが、はじめのつらい記憶があるせいか、中学校に行く具合が悪くなります。全然違う中学校のはずなのに、やっぱりトラウマって消えないんですね。あの頃の子たちっていろいろと葛藤しているせいか、独特のピリつき感というか、視線にとても遮断を感じるんです。無理矢理聞かされているのがわかるので、申し訳ないなと思いつつもお話ししていました。でも、最近とても嬉しいのが、TwitterやSNSで「あのとき〇〇中学校でサヘルさんの話を聞いた者です」と連絡をいただくことが本当に多くて。そのときの経験が自分の財産で、今は国際支援の仕事についていますとか、NPOで活動していますと。「サヘルさんの言葉が背中を押してくれました」と言われることがすごく多



いんですよ。だから、結果って求めてもすぐに出るものではないなあと。種をまいて、すぐに花が咲くわけじゃない。今の事務所に入って13年、14年になります、10年以上ずっと種をまいてきて、続けてきた活動が今ようやく芽を出して、少しずつ伸びているんですよ。私の考えを引き継いでくれる次の世代がようやく生まれてきたので、心から嬉しく、頼もしく思っています。

多様化する社会、外国籍の子のケアを

日本に来てもう28年になります。母娘二人きりだったので、日本以外の国だったら生きていけなかったでしょう。地域の方々が私たちに手を差し伸べて、ずっと支えてくれたんです。本当に日本に来てよかったと思います。だからどうか皆さんも、困っている人がいたら寛大な気持ちで手を差し伸べてあげてほしい。

SOSとか多様性とか言葉だけが一人歩きして、学校にこれだけさまざまな国籍の子たちがいるのに、せっかくの機会を有効活用できていない気がします。課外授業や異文化交流の時間では、その子を先生役にするなどして、ちゃんとスポットライトが当たる機会を作ってあげるといいですね。

外国籍の子がいくら流ちょうに日本語を喋れたとしても、親御さんは喋れないケースが多いです。10年、20年と日本にいても、そういう家の子が宿題をしてくれなかったとしても、どうか叱らないであげてください。私も子どもの頃、一度も宿題をやってあげたことはありませんでした。外国人に限らず一人親家庭は、親が夜遅くまで仕事しているの、家に帰っても宿題を見てくれる人がいないんです。日本語がわからないから、教えてくれる人もいない。「うちは一人親で、親も日本語がしゃべれないんです」

なんて、絶対に言えませんでした。勉強はなるべく学校の授業で完結させてあげてほしいです。

また、日本では「ハーフトalent」のように「ハーフ」という言葉をよく使いますが、意外と当事者は半人前と言われたように傷ついちゃうんです。複数のルーツをちゃんともちあわせている「ダブル」なんだって、自分の出自に誇りをもてるように、敬意をもってダブルと呼んであげてほしいですね。

「先生」の着ぐるみ、脱いでみませんか

コロナで制度がころころ変わったり、親御さんから厳しいことを言われたりして、教育現場も振り回されつつ、必死で応えようとされていると感じます。ただ、先生方も人間。教える立場になると、皆さんどうしても「先生」という立派な存在であろうとしますが、むしろ弱さや葛藤もさらけ出して、生徒が弱音を吐ける友人であってほしい。

自分をさらけ出すと、先生自身救われると思います。生きているうちに身につけた鎧はどんどん重くなり、がんじがらめになっていくし、夢だった「先生」という職業がいつのまにか苦しいものになってしまうのでは、とても悲しいじゃないですか。

失敗ってすごい財産だと思うんです。私自身の経験をお伝えするのも、キラキラしている私じゃなくて、ポロポロの自分を提示することで、なんだ、こんな経験をした人も人は変わるんだって思ってもらいたいから。人の失敗談から、人は学べると思っています。先生方もご自身の失敗談や傷ついた経験をたくさん話してあげてほしい。そこから子どもたちは何らかのヒントを得たり、道を見い出せると思います。

互いの傷を分かち合って共鳴し、対話する

これまで生きてきて、「どうして自分ばかりが」と思う日も正直ありました。でも35歳になったいま、改めて思うのは、人生のあらゆる試練や困難も自分にとってとはとてもポジティブで、プラスの出来事だったということ。いろんなことを経験させていたんだからこそ、今の私があります。これまでの経験がなければきっと今の考え方にはたどり着いていないですし、難民や子どもたちへの支援活動も、してあげたい、支えたいという気持ちには絶対ならなかったと思うので、人生に無駄なことはない。

人間ってただ生きていくだけで傷を抱える生き物。傷があるから人々は共鳴するし、わかり合える。傷を分かち合うことは対話なんです。自分が今までもがいたことは、すごくいい痛みだったと今なら思えます。

私は今の母に引き取ってもらえて、本当によかった。こういう考え方をもらったのも、支援活動を始めたのも、やはり母の背中を見つけてきたからです。

彼女が今まで私にしてくれてくれたことを思うと、もはや母を超えた偉大な存在だと思うし、一生頭が上がりません。二人でたくさんさんの苦しみ分かち合い、たくさん衝突して、多くの葛藤を乗り越えたからこそこの関係です。

母が一番すごいところ、私が最も大好きなところは、私を無理矢理変えようとはしないこと。「もうあきらめた」って、いつも言われます。「サヘルは相当頑固だ」って母は言いますが、私からしたら、母が頑固だから私も頑固になったんですよ。

やっぱり親子だなんて思います。いろんなところで、やっぱり親子、似てるねって。

学びのデジタルトランスフォーメーションに向けて

ポイント

- ① GIGAスクール構想で、すべての子どもたちにデジタル感覚を育む。
- ② 先生たちの創意工夫が重要である。試しにやってみる、よかつたら続けてみる、駄目だったらやめてみる、の高速の繰り返しで、学びのデジタルトランスフォーメーションへ。
- ③ いかに頭を素通りさせないか、フル回転させるか、それは紙もデジタルも本質は変わらない。

すべての子どもたちにデジタル感覚を育む

一昨年、中国からの留学生の歓迎会で、「本当に日本人はお財布を持ち歩いているんですね」と言われた。学生たちは何を言われているかわからないようであった。中国は、すべてがスマホで済むし、露天のお年寄りからもものを買うときですら、スマホで支払うのが常識である。一方、わが国はスマホを持っていない人にも対応すべきだとか、とてもものきなことを話題にしている。こうした差は、単なる機器所有の差を超えて、意識の差、発想の差になっていること



東京学芸大学准教授
高橋 純

に留意すべきであろう。

1815年の出版物によれば、教師たちが、最近の生徒たちは紙に頼りすぎで、石板が上手に使えないと嘆いていたそうである。今のわれわれからみれば、紙が最新テクノロジーで、反対していた人がいたなんて笑い話である。しかし現在、デジタルに頼りすぎるべきではなく、紙から学ぶべきだといった論調を大手新聞社などが真剣に述べている。デジタルに対する意識や発想の差が表出してしまっているといえる。まさに歴史は繰り返すといえる。

わが国は、OECDの国際成人力調査（PIAAC）など各種調

査をみても、デジタル活用に関して社会全体が遅れている、その中で学校も遅れているといえる。加えて、文部科学省の学校における教育の情報化の実態等に関する調査によれば、教育用コンピュータ1台当たりの児童・生徒数は、最高の1:8人/台（佐賀県）から6:6人/台（3県）までの地域間格差がある。この差を埋めていくのもGIGAスクール構想のねらいである。

将来、厳しい国際競争の中で活躍せざるを得ない子どもたちのために、何を伝えていくべきなのか、改めて見直していく必要がある。そして、多くの大人が毎日活用するPCから、義務教育段階でも日常的に活用すべきであろう。生まれや環境に関

PCを活用した学習とは



係なく、すべての子どもがデジタルを体験したり学んだりする機会を保障すべきである。

学びのデジタルトランスフォーメーションへ

GIGAスクール構想により学校のICT環境整備が進んでいる。同時にコロナ禍により、多くの教師たちも、動画やテレビ会議システムで教員研修をしたりする必要性に迫られた。その結果、時や場所を選ばずに学ぶことができ、単なる知識伝達であれば、十分に学べると多くの教師が思い始めている。集合するために移動する時間が無駄ではないかとか、動画で繰り返し学ぶことができるとか、中断ができる便利さも知ったのである。現在、リモートの教員研修は急速に普及している。

同時に、教師にとって便利なことは、子どもにとっても便利である。子どもがYouTubeなどの動画で学びたがることを教師自身が理解したケースもある。その時、心配になるのは、自分自身の授業が単なる情報伝達になっていないか、それは動画に取って代わられ

てしまうのではないかという危惧である。YouTubeをはじめとした動画サイトには、子どもの興味を引き、わかりやすく説明する学習動画も溢れている。普通の教師の授業よりおもしろい。

そこで、ある中学校教師は、受験のための知識伝達を中心とした授業スタイルから、子どもたちが集合したからこそできる対話のある協働的な学びへ急速に工夫を重ねている。もちろん、知識伝達のための自作の動画や教材による非同期な学びを交えながらである。ここにGIGAスクール構想で準備されたICT環境を活用したのである。子どもたちの理解度は、従来よりも深まっており、教師自身も手応えを感じている。

ポイントは、従来授業の高度化や最適化のためにICTを活用する方向性よりも、デジタル時代に合わせ、根幹である子どもたちの学びを刷新し始めている。これこそまさに学びのデジタルトランスフォーメーションであろう。紙よりデジタルで学んだほうがいいといった程度の発想は、従来の延長であり、貧弱である。財

布が不要になるくらいのは既に学校現場で起こり始めている。先生方の創意工夫は素晴らしいのである。試しにやってみる、よかつたら続けてみる、駄目だったらやめてみる、この高速の繰り返しが効いている。

いかに頭をフル回転させるか

デジタルに賛辞を贈ると、デメリットも書くべきだと指摘を受けることも多い。しかし、車と同じで、メリットがあるように活用すればメリットが得られるし、デメリットが表出しないように活用していくこともまた重要である。

デジタルの心配の一つは、鮮明な画像や、わかりやすい動画等で学習が進むかといったことである。頭を使っているのかという問題である。しかし、①情報を知覚、②認知・思考・判断等、③表現、④PCの処理という学習の流れで考えれば、デジタルを使って簡単になるのは、まずは①情報を知覚である。

空の鮮明な写真をみて「きれいだな」で終わらず、「青いのか」「碧いのか」「蒼いのか」と考える



のは、②認知・思考・判断等の段階に相当すると考えられるが、これは紙でもデジタルでも変わらない。ここで頭をフル回転させられるかどうかである。例えば、見方・考え方が働かせられるかどうかとか、過去の経験と比較できるかなどが問われているのである。本だって、パラパラめくれば①↓③と、②を飛ばしているといえるし、白黒の不鮮明な小さな写真を単に知覚するために頭を使っているように感じただけで、本質的には学んでいない可能性もある。

いかに頭を素通りさせずに、フル回転させるか、それは紙もデジタルも本質は変わらない。☹️

「つながる」がキーワード 未来社会の創り手を育む かわさきGIGAスクール 構想



川崎市総合教育センター情報・視聴覚センター
指導主事 新田 瑞江

ポイント

- ① 教育委員会事務局の各部署が「つながる」ことで共通理解しながら「かわさきGIGAスクール構想」を推進。
- ② 民間企業と「つながる」ことで教職員に対する研修が充実。
- ③ 今後の課題は各学校が「つながり」ながら「かわさきGIGAスクール構想」を推進していくこと。

教育委員会事務局が「つながる」

川崎市では、総合教育センター情報・視聴覚センターが中心となって「GIGAスクール構想」を推進している。令和2年度中に11万7千台の端末の整備完了というだけでなく大きな事業であるが、さらに整備のその先には子どもたちの学びの充実が待っている。しかし、「川崎市としてGIGAスクール構想でどのような教育を展開するのか」、この課題は単に一部署が奮起してできることではない。それは教育全体に大きな変革をもたらすからである。

令和2年7月、教育委員会事務局



教職員向けハンドブック

局の各部署の代表者が集まり、教職員向けに川崎市のGIGAスクール構想のリーフレットを作成することになった。そこで議論され、決まったことが「かわさきGIGAスクール構想」の核心となった。育てたい子どもの姿を「未来社会の創り手」とし、「つながる」をキーワードに「かわさき教育プラン」の実現に向け、段階的に取り組みを進めていく。さらに10月

には教職員向けのハンドブックを作成することになり、各部署がそれぞれの立場でページを分担することとなった。幾度となくもった編集会議では、目指す方向性や必要な運用ルール等が共有され、「かわさきGIGAスクール構想」のソフト面が構築されていった。こうして、教育委員会事務局のさまざまな部署が「つながる」ことでできあがった教職員向けハンドブックは、「川崎市としてGIGAスクール構想でどのような教育を展開するのか」という課題に向けた、各部署の主体性が詰まったものとなった。令和3年3月上旬に川崎市のすべての教職員の手に届いている。

本誌でも「つながる」をキーワードに、川崎市のGIGAスクール構想構築に向けた取り組みを述べることにする。

民間企業と「つながる」

川崎市では、小中学校にはChromebook、特別支援学校にはiPadを採用した。特にChromebookは教職員も、教育委員会事務局の職員も、触ったこと

のない人がほとんどで、新しいスタートとなる。どのように研修をしていくかが課題となった。

まだ整備が完了していない中、Google 合同会社のご協力のもと、機器貸出をしていただいたうえで実現した Kickstart program は大変好評で、約 1 千人の教職員や事務局職員が受講することができた。「まず触ってみる」ことで「どのような学びをつくっていくか」というイメージがもてたことは大きかった。また、小中学校へは「ミライシード」を導入しているが、製作元の(株)ベネッセコーポレーションのご協力によって、市内数校の教育情報推進モデル校等への研修、また各学校の GIGA スクール構想推進教師(GSL)への研修等が実現した。ハンドブックの作成にもご協力いただいた。さらに、令和3年度は、(株)JMC による各学校への巡回研修を予定している。また、Google 合同会社のご協力のもと、川崎市の GIGA スクール構想のプロモーション動画を制作していただいた。これは広く市民にも公開される。市のホームページとしても「かわさき GIGA スクール構想」のペー

ジを作成し、それでも情報配信しているが、保護者や市民への理解をいただくことは大変重要である。

民間企業と「つながる」ことで、市のマンパワーでは成し得なかったことが実現している。感謝するとともに、今後の教育にとつて、こうした企業連携は欠かせないものであると実感している。今回も教育出版株式会社よりこのように取り組みを発信する場をいただけたことに大変感謝している。

各学校が「つながる」

各学校の校内組織として、これまで同様に機器管理等も行う情報教育担当のほかに、「かわさき GIGA スクール構想」を推進するリーダーとしての「GIGA スクール構想推進教師(GSL)」を新たに1〜2名設けるようにした。このリーダーがいかに校内で孤立せずに、やりがいをもって取り組めるかが、重要な鍵であると認識している。推進するうえで困ったことを共有したり、取り組みを共有したりできるような気軽な場が必要である。そこで、令和3年2月から GIGA スクール構想推進教師を中心とした「Google Classroom」

を作った。現在、毎日のように、その中で情報交換がなされているところである。また、教育長からメッセージを送ったり、教育委員会から質問へ回答したりというような、委員会と先生とのフラットな場となっている。このような場を作ることで、教職員の主体性やマインドセットを促すきっかけになると考えている。

令和3年度は、さらにその横のつながりをもつていただきたいと、地区ごとに「かわさき GIGA スクール構想推進協力校」という拠点校を設けた。また、前述の市全体のクラスルームはそのまま持ち続けるとして、新たに地区ごとに「Google チャット」のグループを



段階的に推進する「かわさきGIGAスクール構想」

作成する予定である。これにより、さらに気軽に悩みや取り組みを共有できるようにしていく。そして、よい事例や資料を共有するサイトも構築する。さまざまな立場での考えが融け合う場を設けることで、川崎市としての取り組みがより一層同じベクトルとして推進できるものと考えている。

令和3年度は「まず使ってみる」を合い言葉に、ステップ1として、インターネットに「つながる」ことで、いつでも、どの教科でも使えることを実感する段階としている。令和4年度はステップ2として、1人1台端末によって既習や他者と「つながる」ことで、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善ができ、資質・能力をより確実に育成する段階としている。令和5年度はステップ3として、各教科等の学びが、他教科等や生活に「つながる」ことで、社会にあるさまざまな課題の解決や一人一人の夢の実現に活かす段階としている。かわさき教育プランの基本目標である「自主・自立」「共生・協働」の推進に向け、段階的に、そして着実に、推進を図っていききたい。

だれにでもできる「富岡システム」の提案 ～「YouTube」と「Zoom」,「開発用PT」を用いた 研究発表の在り方～

きょういく 見聞録

新型コロナウイルス等の感染症により集合対面型の研究発表が困難な場合

でも、「YouTube」と「Zoom」を活用したハイブリッド方式を用いることにより、研

究発表を効果的に行うことができると考えます。加えて、研究発表の年に増えてしま
う残業時間も、研究発表のための「プロジェクトチーム (PT)」を作成するこ
とで改善することができ、働き方改革の推進につながります。



熊本県 苓北町立富岡小学校 校長 島田 美彦 よしひこ

① 令和3年1月28日の研究発表へ向けて

本校は全校児童72名、職員14名の小規模校です。そして、当該(令和2)年度は、本校の学力充実研究発表会の年でした。令和2年の4月、5月は緊急事態宣言により、臨時休業を余儀なくされていました。しかし、研究内容や発表方法等は従前の集合対面型を念頭に入れ、研究の成果を公開すべく、それぞれの授業者、協力者等の選別、その他依頼を含め検討を重ねていたところでした。

その一方で、全国各地での新型コロナウイルスは令和2年度の教育課程実施に大きな影響を及ぼしました。同時に研究発表会を実施することにも暗雲が垂れ込め、研究発表会を実施するのか、中止するのか、また紙上発表で行うのか予断を許さない状況が続いていました。

② オンライン発表への方向転換

8月の研究推進委員会終了後、会議の中で私は「動画配信ソフトを使っのオンライン学習発表会を行う」と発表しました。職員の反応としては、「オンラインで実際に研究発表ができるのだろうか」と不安の声が上がっていました。教頭と教務及および研究主任にこの旨を伝え、推進体制の構築に取りかかりました。町教委から町立の小中学校に配置していただいているICT支援員には職員へのOJTを依頼し、授業や行事等でICTを使う度に支援に入ってもらうようにしました。

③ 効果的なシステムとして機能するために

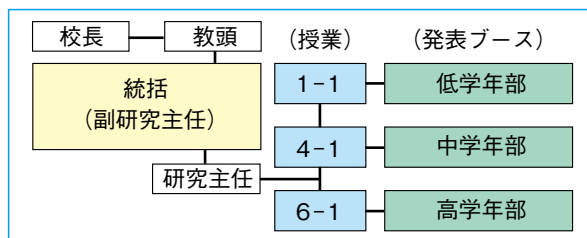
(1) 事前準備

11月までの進捗状況は、想定よりも遅れており、現在の研究推進体制では、達成が困難ではないかという状況にありました。校内研修の後、職員に対し、ICTの活用を念頭においた研究発表運営を進めていくように話しました。その後、図のような研究発表会用のプロジェクトチーム(PT)を立ち上げました。これは、限られた時間内で効果的に組織が機能すると考えたからです。

この運営機構で特徴的なこととして、一般的に研究の統括を行うのは教頭あるいは研究主任ですが、新しい発表スタイルでもあり、研究主任の負担が大きすぎると判断しました。研究主任には研究内容そのものを充実させて欲しいこと、教頭には研究発表案内他、突発的に生じてきたリスクをマネジメントする立場として務めさせました。このようなことから、ICTにも堪能な副研究主任に統括を務めさせました。

(2) 研究発表会(直近2週間)までの方法

直近2週間の研究発表会準備スケジュールの流れは、右のとおりでした。



■プロジェクトチーム(P1)組織図

| 日数 | 内容 |
|------|---------------------|
| 14日前 | 研究授業のビデオ撮影 |
| 8日前 | 撮影したビデオの編集 |
| 3日前 | 全職員で編集ビデオの確認 |
| 2日前 | 全体会・分科会リハーサル動画仮配信確認 |
| 1日前 | 説明・配信リハーサル・動線確認 |
| 当日 | 全体会・分科会の動画配信 |

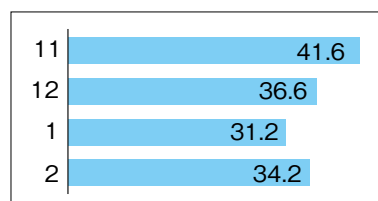
(3) 機材

授業撮影時は、前後左右から4台のカメラで撮影しました。授業研究会の時には、撮影用カメラ、大型ディスプレイ、PCを使用しました。さらに、HDMIにビデオキャストを使用しました。インターネットにはLANケーブルで接続しました。



④ 働き方改革へつながる結果に

研究発表会を行えば、職員の残業時間も大幅に増えます。特に発表前の2か月間は増加します。私も多くの研究発表の場を経験してきましたが、職員の残業時間が増えこそすれ、減少することはありませんでした。また、残業時間については令和2年6月29日の「働き方改革推進法」により原則として月あたり上限45時間の枠が設けられています。本校では、研究発表会前後4か月の平均労働時間を45時間以下に収めることができました。「富岡システム」の構築と「働き方改革」の視点から鑑みて、今後の研究の推進の在り方で大きな成果を出すことができたと考えています。



■ 4か月の月平均残業時間

⑤ GIGA スクール構想の実現へ

新年度から本格的に始まる「GIGA スクール構想」についても、一人1台タブレットを使用させ、授業を進めることを想定しています。本校でも研究発表会のみならず、日ごろの授業の充実を図ることによって、新しい展開に進めています。そして、今回「富岡システム」の設計により、個々の学びをインターネットのオンラインによる配信と結びつけることにより、GIGA スクール構想の実現につながっていくものと考えています。これらの実践にPTを関連させ、「富岡システム」を提案しました。



⑥ 成果と課題

(1) プロジェクトチーム

オンラインで参加している方からは、「とても参考になった」「これからの時代に必要なので本校でも進めていきたい」との感想を聞くことができました。職員からは「それぞれの立場で先を見通しながら全体へ呼びかけ、動きが活発になった」「組織の結束につながった」「自分の立場がわかりやすかった」というように「よかった」とする意見が多くありました。その一方で、「一部の職員に負担が多くかかり、負担感が増した」という感想もありました。

(2) オンライン発表

「取り組みを具体的に伝えられ、それに対する意見をすぐに得ることができたのは紙面発表よりもよかった。」という意見がありました。その一方で、統括を担当させた副研究主任の負担が増えてしまいました。

小さな学校の小さな実践ですが、オンラインによる研究発表スタイルとPTの設計により、効果的に発表することができました。一つのシステムとして機能し、成果を上げたことは、私の大きな財産となりました。今回の研究がご覧になられている全国の先生方の役に立てれば幸いです。



●パレスチナに応援メッセージを送る（難民支援をしている JVC 職員の子山村順子さんへ）

高知県南国市立大篠小学校 教諭 谷口忠大

世界は変えられるカラフルに 「つながる」から「つなげる」へ（6年）

南国市立大篠小学校（児童数789名、30学級）は、学校教育目標「未来を拓く自己を育てる大篠小学校」の実現のために、算数科と生活科・総合的な学習の時間を実践研究の両輪と位置付けている。

総合的な学習の時間は、3年「大篠（校区）」、4年「環境」、5年「福祉」、6年「平和」とテーマを決めて取り組んでいる。人とのつながりによって、子どもたちの意識が大きく変容し、粘り強く探究課題の解決に取り組んだ6年の実践を紹介する。

子どもたちの本音からのスタート

戦争や平和について子どもたちの関心は低く、「戦争は昔のことだから」「自分たちががんばっても世界は変えられないから」という子どもたちの本音を引き出すことが学習のスタートとなった。

「つながる」ことで変わる意識と言動

そのような中、戦後75周年を特集した新聞記事から、広島在住のシンガーソングライターであり、平和公園のガイドをしている瀬戸麻由さんの存在を知り、瀬戸さんの「Colorful World」という曲を鑑賞した。平和を願う歌詞と瀬戸さんのきれいな声

に子どもたちは心を打たれ、思い切ってリモートでの交流を依頼することにした。

瀬戸さんとの交流を重ねながら、子どもたちはさまざまな立場で平和活動をしている方（北方領土土元島民、北方領土根室研究会の高校生、外務省職員、難民支援を行っているJVC職員等）とリモートで交流をするようになった。その中で、「活動することによって人とのつながりが増えて、わくわくする」「活動に賛同してくれない人や否定的な人もいるが、その人たちの背景を知ること、その人たちのことを理解できる」といった共通の思いを知ることになった。

子どもたちの中に「つながること」「対立ではなく相互理解すること」



●瀬戸さんと修学旅行の広島で交流



●北方領土元島民 得能宏さんとのリモート交流



●1,300人の中高生に実施したアンケートの集計



●本校で瀬戸さんと動画作成



●平和記念公園で瀬戸さんと「Colorful World」を歌う



●外務省職員とのリモート交流



●北方領土返還全国大会にリモート参加

が、世界を変える力になるという
 実感が生まれていった。また、子
 どもたちは、「時間割にないけど
 明日、総合の時間をとって欲しい」
 と要求してきたり、核兵器や地元
 の戦争遺跡について自主的に調べ
 てきたりするなど、主体的に動く
 ようになってきた。そして、意見
 の食い違いが生じたときにも、互
 いの思いや気持ちを理解し、尊重
 し合い、友達と協働することを楽



QRコードから
 YouTube動画
 をご覧いただ
 けます。



●根室高校北方領土研究会とのリモート交流

しみながら粘り強く問題の解決を
 図っていくようになった。

「つなげる」ための表現 活動と予想を超える反響

「若い人に平和への関心をもって
 もらいたい」、そのために「自分た
 ちがつながってきた人たちのことを
 たくさんの人に知ってほしい」「自
 分たちが変わったことを伝えたい」
 という思いの高まりは、それらを地
 元新聞に投稿したり、動画によって
 表現したりすることにつながった。
 動画作成では、瀬戸さんが、はるば
 る本校まで駆けつけてくれた。子ど
 もたちと瀬戸さんの歌声をのせ、「世
 界は変えられる」という思いを込め
 た動画をたくさんの方に見ていただ
 きたい。

（視聴方法：YouTube「世界に平和
 を 大篠小学校6年1組」で検索）

地元新聞に掲載された投稿記事と
 動画に対して、交流をしてきた方々
 からは「身に余る紹介」「胸がいっ
 ぱいになった」といった感想が寄せ
 られるとともに、動画の再生回数が
 予想以上に伸び、知らない方々から
 も、称賛や励ましのコメントをたく
 さんいただいた。子どもたちは、反
 響の大きさに充実感や達成感をも
 ち、「つなげる」ことができたこと
 を喜びあった。

新潟

地域総掛かりの活動へ — 学校と地域の連携・協働に焦点を当てて —

南魚沼市学校支援地域本部
統括コーディネーター

松崎 一昭

近年、地域から学校への支援を中心とした「学校支援地域本部」を基盤に、地域と学校がパートナーとなり双方向の関わりを大切にしていける「地域学校協働活動」の取り組みが進められている。この取り組みに向け本市では、平成29年度より市内全小中学校（小17校、中4校）を対象に学校と地域との連絡調整役としての地域コーディネーターの配置を進めた。そして、市内12地区にある地域づくり協議会（以下協議会）とも連携を図ってきた。これは、協議会は各地域の活性化のための事業を担い、一方、学校は地域内の教育機関として双方が地域における連携・協働を推進する中核としての役割を期待したものである。実際、学校への地域コーディネーターの配置過程で、協議会より地域住民の人材紹介を基に、円滑に配置を進めた事例が多数あった。現在各校では、校内の地域連携担当者、地域コーディネーター、協議会関係者等を中心に「学校、地域双方の持てる力を生かしながら子ども、地域を育てる」視点を共有し、連携・協働に関わる活動計画等を進めている。

今後、学校教育、社会教育分野の教育委員会部局と連携し、学校を拠点とした「しおざわ本部」「むいかまち本部」「やまと本部」の3本部を拡充していく予定である。各本部の組織構成として学校、協議会、関係機関・団体（例：家庭教育支援、公民館、企業、NPO法人、高校・大学、PTA、高齢者団体等）とのネットワークづくりや地域住民、保護者の意見などを反映させる学校運営協議会の設置などとの新たな協働体制を進めていく。

地域と学校の双方向の活動推進は、子どもや保護者、教職員、地域住民等が関わり合うことが要諦となり、子どもたちの学びや成長を支え、自分たちの学校や地域の未来を創る。このことは地域総掛かりの活動へのスタートでもある。



QRコードから南魚沼市教育委員会の取り組みをご覧ください。



全国各地のさまざまな取り組みを紹介します。

北海道

ニセコスタイルの教育

ニセコ町教育委員 教育長 片岡 辰三

ニセコ町の人口は約5,000人ですが、近年、パウダースノーのスキー場として国際的にも注目されており、外国人の観光客が大変増加しています。町内には幼児センター（幼保一体的運用、163名）、小学校2校（240名、37名）、中学校1校（105名）、町立高校1校（58名）が存在します。

ニセコ町では、ニセコスタイルの教育として、幼児センター、小学校、中学校、高校を一つの学園体と位置付けて、4校種のそれぞれの発達段階に応じた教育を、連続性を踏まえて展開しています。

特に近年、ニセコ町には外国人が多数訪れ、移住定着している人も少なくなく、そのような中で、外国語教育の重要性が指摘されています。特に、本町においては、「英語教育」と「ふるさと学習」に力を入れており、「ニセコ町英語教育推進プラン」を策定し、英語教育の推進充実に取り組んでいます。また、ふるさと学習については、ニセコ町の文化や歴史、景勝地などの基礎的知識を学ぶ「ニセコ学」を実施し、子どもたちのモチベーションを高めるため「ニセコ学検定」に取り組むこととしています。

英語教育の取り組みとして、ニセコ小学校では、「インターナショナルリーディングプロジェクト」として、町内在住の絵本作家とニセコ町国際交流員による読み聞かせや、外国語を使ったゲームを通して、さまざまな国の文化に親しむ活動を実施しました。ニセコ町国際交流員は現在5名で、出身地はドイツ1名、アメリカ2名、中国1名、マレーシア1名と国際色豊かです。また、ニセコ小学校のすぐそばには、北海道インターナショナルスクール小学部があり、交流を深めています。

今後は「ニセコ町英語教育推進プラン」の見直しを図り各学校等の取り組みを共有するとともに、4校種との連続性を踏まえ有機的な展開を目指したいと考えています。



QRコードからニセコ町教育委員会の取り組みをご覧ください。



岡山

1人1台 PCを活用して毎日「マイクロステップ・スタディ」に取り組む

笠岡市立今井小学校 校長 高橋 伸明

本校では、コロナ禍による臨時休業期間に企業のご協力によってChromebookをお借りしたことに始まり、「GIGAスクール構想」に基づいた整備もあって、令和2年度ほぼ1年間、子どもは1人1台PC環境で学習してきました。

取り組んでいる学習の一つに、岡山大学教育学研究科実践データサイエンスセンターが推進する、教育ビッグデータ技術を活用した新型e-learning「マイクロステップ・スタディ」があります。令和2年10月から5・6年生が朝の帯時間を活用して「漢字読みドリル」「基本英単語」の学習を行っています。やっていることはとてもシンプルです。PCで専用ウェブサイトにアクセスし、漢字の読みや英単語の意味を「覚えよう」とするのではなく、わかるかわからないかを答えて「見流す」程度のことを、毎日7～8分の時間をかけて行っているのみです。

このシステムの詳細については、上記センターのウェブサイト等をご覧ください。実際に本校で子どもの意識調査をしたところ、82.4%がわかる漢字・英単語が増えたと回答しました。また、この学習のよさとして「間違った問題を繰り返し出してくれるので覚えやすい」「だんだんと英語の級が上がっていくので楽しい」等の印象をもっています。高精度教育ビッグデータを活用したマイクロステップ・スケジューリング技術により、個別最適化された学習環境が提供されているという背景を、子どもの意識から見取ることができます。

また、この学習によって「PCが『学習の道具』と思える気持ちが高まった」と回答した子どもは88.2%います。教育におけるデジタル機器利用率が日本の子どもはOECD加盟国で最低水準にあり、逆にゲームやチャット利用の割合は最も高いという結果が「PISA2018」と同時

に行われた調査に表れましたが、毎日のこうした取り組みが子どもに意識変容をもたらす可能性のあることも実感しています。



QRコードから学校ホームページをご覧ください。



東京

Society5.0 時代をたくましく生き抜く力の育成を目指して

—教師の創意工夫と柔軟な発想による「A分類」「B分類」の実践の開発—

前文京区立関口台町小学校 校長 相原 雄三

本校は、目指す学校像として「笑顔があふれ 夢を育む学校」を掲げ、持続可能な社会を創る主人公である子どもたちが、予測困難な未来の社会を“笑顔でたくましく生き抜く力”が育つ学びを進めている。昨年度のコロナ禍での臨時休校期間中でも、子どもたちが笑顔になれるように、「学びを止めない学校」として、家庭学習と連動したオンライン授業や学習サポート動画の配信、メールを活用した図書の貸出しなどに取り組んできた。（本校のホームページを参照）

現在は、Society5.0 時代をたくましく生き抜く力を子どもたちに育成するために、プログラミング教育の充実に力を入れ、担任教諭が主導で行う実践と、企業等と連携して行う実践の二つの柱で研究を行っている。教師主導で行う実践では、1人1台の端末を活用し、文部科学省が例示する学習活動の分類のうち、「A分類：学習指導要領で例示されている単元等で実施されているもの」と「B分類：学習指導要領に例示されていないが、学習指導要領に示される各教科等の内容を指導する中で実施するもの」の実践の開発に取り組んでいる。例えば、第3学年の音楽「拍にのってリズムを感じ取るう」の学習では、Scratch（スクラッチ）のブロックにリズムパターンを組み込み、そのブロックを使って学年キャラクターのイメージにあうリズム譜を試行錯誤しながら制作する活動を行った。また、第5学年の算数「正多角形」の学習では、embot（エムボット）というロボットに正多角形を描かせ、正多角形の性質をクリアしているかを検証する活動を行った。これは一例ではあるが、教師の創意工夫と柔軟な発想で実践の開発を進めているところである。

今後展開される「GIGAスクール構想」においても、企業等との連携を大切にしながらも、教師自身が前向きにこの課題に取り組み、子どもたちの夢の実現に資する生き抜く力を育てていきたい。



QRコードから学校ホームページをご覧ください。



親と子どもが楽しむ美術館② 子どもたちが1日楽しむことが できる美術館

六花亭製菓株式会社「中札内美術村」「六花の森」
館長 飯田郷介



企画展示「みみをすすすように 酒井駒子」展
「PLAY! MUSEUM」は、1階には年間展示場と企画展示場が、上階には、遊

美術館に行きますと、多くの美術館は、館内は作品保護のため薄暗く、また監視員の厳しい視線のなかで、大人でも緊張してしまう空間で、なおさら子どもたちにとっては近づきたい場所かもしれません。そのような中、全国各地には子どもたちに向けた空間づくりや楽しいプログラムを工夫している美術館が数多くあります。
親と子どもが、いつでも、一日楽しむことができる美術館は、子どもを生涯のテーマとして描き続けた、いわさきちひろの作品を親子で楽しむことができる「ちひろ美術館・東京」(東京都練馬区)とその分館「安曇野ちひろ美術館」(長野県北安曇郡松川村)やドイツの児童文学作家ミヒャエル・エンデの世界を展開している「黒姫童話館」(長野県信濃町)、絵本の専門美術館「軽井沢絵本の森美術館」(長野県軽井沢町)などがあります。昨年6月にJR中央線立川駅北口に、子どもから大人まで誰でも楽しむことができる「黒姫童話館」(長野県信濃町)、絵本の専門美術館「軽井沢絵本の森美術館」(長野県軽井沢町)などがあります。昨年6月にJR中央線立川駅北口に、子どもから大人まで誰でも楽しむことができる「黒姫童話館」(長野県信濃町)、絵本の専門美術館「軽井沢絵本の森美術館」(長野県軽井沢町)などがあります。

びのスペース「PLAY! PARK」(プレイパーク)が設けられています。展示は、「絵とことば」をテーマ、絵本を空間で見せるといふ今までない展示空間の中で、さまざまな体験を通じて、自由に感じて、発見できる場所として、子どもたちが楽しんで回遊できるように多くの工夫、アイデアが盛り込まれています。企画展示「みみをすすすように 酒井駒子」展(4月10日〜7月4日)では、『よるくま』、『金曜日の砂糖ちゃん』などで知られる絵本作家酒井駒子初の本格的な個展です。会場では、これまでに刊行された20冊を超す絵本から選ばれた約250点の原画が、天然の杉材で作られた額やケースに展示され、物語や文の断片を巡り、散歩するように、ゆっくりと歩きながら、ときに立ち止まりながら、耳をすますように「絵とことば」が出会う展示会となっています。年間展示「ぐりとぐら しあわせの本」展では、原画は展示され、しあわせの本」展では、原画は展示されていません。来場者は、絵本のページをめくる代わりに、自分自身が、ぐりとぐらになって、四季折々の絵本の中を歩いていき、不思議な出会いや冒険、すてきなもの、草花や美味しいものに子どもたちは心を躍らせ、親たちは、懐かしい記憶と新しい発見に出会い、親子で楽しむことができる展示になっています。

上階の「PLAY! PARK」は、「未知との出会い」をテーマに自由な発想で遊ぶことができる、子どものための屋内広場です。(大きなお皿)では、建築家やクリエイターたちが制作した身近な素材でできた遊具(これもアート作品です)を使って、子どもが自ら遊びを見つけ、大人も一緒になって楽しく過ごすことができます。今回登場した新聞紙を使った手作り大型遊具「くしゃくしゃおぼけ」では、新聞紙でできた森の中を歩き回り、ミノムシのようにぶらさがったり、ダンボールの洞窟などで遊ぶことができ、さまざまなエリアで身体をつかった遊びやアートやサイエンスを学ぶ日替わりのワークショップも用意され、一日楽しむことができます。子どもたちがはつらつと遊び回っています。こうして、子どもたちと美術館との距離が縮まり、自然の内にアートのふれて、アートに関心をもち、やがて美術館に足を運んでくれると期待しています。



年間展示「ぐりとぐら しあわせの本」展

飯田郷介 (Kiyoske Iida)
六花亭製菓株式会社「中札内美術村」「六花の森」館長
1973年早稲田大学理工学部建築学科卒業、株式会社大林組入社、建築設計部門を経て、企画提案部門でプロポーザル、プレゼンテーション、プロデュース業務を担当し、六花亭製菓株式会社の菓子工場、店舗、美術館、音楽ホール、鈴鹿がまほろ株式会社(神奈川県小田原市)の店舗、文化施設、「玉村豊雄ライフ・アート・ミュージアム」(神奈川県箱根町)などの企画・設計・プロデュースに携わる。2013年より現職。



愛知教育大学教授
鈴木 健二

見せるだけで授業ができる！

あるベテラン教師（K先生）から、次のようなメールが届いた。

「15分でできる小さな道徳サンプル版いいですね。このサイトを見せるだけで授業ができます。取り上げられている素材を提示するだけで、子どもたちから意見が出そうです。」

K先生は、若いころから授業づくりに熱心に取り組んでいて、教育雑誌や教育書に提案性の高い実践を数多く発表している実力のある教師である。

そのような教師から、冒頭のようなメールが届いたのをうれしく感じた。

学校全体で「小さな道徳授業」を創る

「小さな道徳授業」は、「提示するだけで子どもたちから意見が出そう」な授業なので、誰でもやってみたくなる。サンプル版(下記参照)を活用してやっているうちに、自分でも創ってみたいくなる。これが「小さな道徳授業」のよさである。

だから、道徳教育の研究をしている学校では、全教師で「小さな道徳授業」づくりに取り組むところが何校も出てきている。

愛知県のある中学校では、研究発表会の日に、「小さな道徳授業」プラン集（『朝道徳実践集』）を参加者に配付した。参加者からは「朝道徳、ぜひやってみたい」などの感想が寄せられ、市内の小中学校に大きな刺激を与えることになった。

この中学校では、朝の時間を活用して週1回「小さな道徳授業」の実践を積み重ね、その成果を実践集にまとめたのである。特筆すべきは、中学校道徳の内容項目をすべて網羅しているということである。そのため、一時間の道徳授業との連動が図りやすくなり、相乗効果が期待できるようになった。



「小さな道徳授業」の質を高める

2021年度の秋に研究発表会を開催する小学校では、2月に興味深い研修会が行われた。研修会のテーマは、「小さな道徳授業」の質を高める”である。

この小学校では、全教師が自分自身で発見した素材を活用して「小さな道徳授業」指導案を作成した。研修会は次のような流れで行われた。

- ①指導案集から選ばれた3つの素材をもとに、どのように活用すると効果的かについて検討する。
- ②指導案と比較して「小さな道徳授業」の質を高めるにはどうしたらよいかを検討する。

これからさらに「小さな道徳授業」プランの開発に取り組み、研究発表会の大きな特色にするという。

「小さな道徳授業」は、今後ますます広がっていくことだろう。「小さな道徳授業」によって、一人でも多くの子どもの心が育っていくことを願っている。

「15分でできる 小さな道徳 教材集(サンプル版)」のお知らせ

道徳の授業はもちろん、朝の会、帰りの会、学年集会、全校朝会、学校行事などさまざまな場面で活用できる「小さな道徳」の教材集を公開しています。「きこえる幸せ」「ほめる力」「伸びない人は、いない」など、子どもたちの身近な素材を活用した授業プランを掲載しており、「小さな道徳」にすぐに取り組むことができます。

小さな道徳 教育出版 検索 https://ssl.kwc.co.jp/ks_dotoku/



ID:guest PASS:guest



いま注目の家電ベンチャー

株式会社シリウスは小さな家電ベンチャー企業ですが、水洗いクリナーヘッド「スイトル」や空気清浄機「ウィルスオットシャー」などがヒットしたおかげで、「がっちりマンデー」や「ガイアの夜明け」といった著名なテレビ番組で取り上げていただき、そのたびに学生時代や柔道の恩師から「隆平、観たぞ!」と連絡をいただきます。教え子のことずつと気にかけてくださるのですから、先ずって本当にありがたいですね。

おかげさまでいまは会社も安定して盤石ですが、経営が不安定だった頃は眠れない日々もありました。それでも絶対に社員の給料は遅配せず、ボーナスも毎年必ず支給してきました。苦しい時期を乗り越えて何とかこまめやってこられたのは、長年柔道で培ってきた信念があったからだと思います。

柔道一家に生まれ育つ

父は北海道警の柔道の名誉師範でした。私は父が47才のときの子で、幼い頃は父の柔道の教え子たち、つまり若い警察官の方たちがいっぱい家にいて、わいわい賑やかで。そんな環境で育ったので、年配の社長や偉い人が相手でも、物怖じしないところが昔からありますね。母方の祖父や叔父も柔道家で、柔道一家なのです。

礼儀もそうですが、柔道の最も大切な教えは「立派な人間を育てる」ということです。ただ試合で勝ってメダルを取れば良いというわけじゃない。最終的に、社会貢献ができる人間にならなければいけないと柔道を通して学びました。

三洋電機のDNA

シリウスを立ち上げる前、三洋電機には21年間在籍していました。パナソニックに吸収されてなくなってしまうことが、一人から人を育てる素晴らしい会社だったのです。柔道以外は何もわからなかった私に多くの経験をさせてくれ、物作りを徹底的に教えてもらいました。私は2010年に退職したので、幕を下ろすところには立ち会っていないのですが、辞めたあとも当時の上司や仲間たちには本当に助けていただきました。私は骨の髄まで三洋だと思っていますし、あの会社には大変な恩があります。シリウスには三洋電機のDNAが半分ぐらい入っていると聞いてもいいでしょう。

事業を成功させるために必要な3つのものをこぞ存じますか。若者、よそ者、馬鹿者です。このうち、馬鹿者はまあ私一人でもいいとして。会社新风を吹き込んでくれる新卒の若手社員や、外側から俯瞰した意見を言ってくれる顧問など、頼もしい仲間たちがいるので心強いです。

三洋電機の理念やDNAを引き継ぎ、売れる日の丸家電を復活させたいという強い思いで、みんなががんばっています。

ご縁に支えられ、続けてきた会社

基本的に、弊社は三洋電機の仲間から出発しているのでも、ご縁でつながってきた会社です。アメリカはMBAとかの思想があっ

て、それは確かに合理的なのでしょうが、日本では合理的でないのかもしれませんが、もつとじつとしたりした、日本特有のご縁とか、先輩・後輩とか仲間とか、そういうもののほうが、実は合理的かもしれないし、そうであってほしい。そういうもので動いてきた歴史のほうが、日本は長いじゃないですか。

時代は流れ、社会のありようも変わります。いまやモーター社員がもてはやされる時代ではないし、人々のコミュニケーションも希薄になった感があります。ただ、愛情を注いでくれた恩師との関係は大切にしたいですね。思い出されるのは、三洋電機がもうつぶれるという時期に高校の同窓会があったんですよ。卒業当時の担任の先生が、「三洋電機も大変だな。でもな、うちの家電は全部三洋だ!」とおっしゃったときには涙がふれました。先生はもう鬼籍に入られました。教育って本当に無償のもの、無限の愛情ですね。教育は、生徒に対してこれだけ心血注いだから、そのぶん返ってくるというものではない。ある意味、ボランティアのようなもので。奉仕の精神がないとできません。多くを与えても相手は逃げていって礼もない、報われない世界。でも先生とは立派なもので、対価を求めないんです。私の先生方は皆さんそうでした。

たくさん先生方からいただいた愛情を、これからは社会に還元していきたいです。

亀井隆平(かめいりゅうへい)

昭和39年 北海道函館市生まれ。昭和62年に国士舘大学体育学部を卒業後、衆議院議員の秘書を務める。平成元年9月三洋電機株式会社入社。平成20年経営企画本部特命担当に就任。平成22年三洋電機株式会社を退社後、平成23年に株式会社シリウス代表取締役社長就任。柔道六段。

Educo Salon

前号について寄せられたご感想です。

- ◆巻頭の佐藤雅彦教授の内容は、非常に示唆に富むものでした。「子どもの探究心と呼応する形の表現ができたときが一番、子どもの集中力が発揮される」の一文は、学習課題の設定に悩む若い先生方への良いアドバイスと感じました。(千葉県 H.M)
- ◆教育 NOW、浅田和伸所長の「現場からどどん発信・発言すべき。日本の教育は良くなる」名言です!! (愛知県 T.Y)
- ◆震災追悼企画に感銘を受けた。東日本大震災の教訓を未来につなぐこと、復興教育をSDGsの取組みと関わり合わせるなど、貴重な提言となっている。(岩手県 H.T)
- ◆飯田郷介氏の「地球となかよしゼミナール」において、六花亭創業者の小田豊四郎氏の「十勝の子供の詩集を作りたい」という心情に心打られました。(茨城県 R.T)

なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命のびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。

教育出版は持続可能な開発目標 (SDGs) を支援しています